
桜花繚乱

御庭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜花繚乱

【Nコード】

N0146Z

【作者名】

御庭

【あらすじ】

此処は『NARUTO』の世界。

別世界で亡くなった少女が転生を果たした世界。

少女は神に願った。

”春野 サクラ”に転生し、人生をやり直したいと…。

これより『NARUTO』の世界で少女の新たな人生が開花する。

※原作を多少壊すかもしれません。

※能力的にチート要素があるかもしれません。

では…宜しく願います…。

始まり

此処は『NARUTO』の世界。

別世界で亡くなった少女が転生を果たした世界。

少女は神に願った。

”春野 サクラ”に転生し、人生をやり直したいと…。

神は少女に言った。

3つの願い事を叶えようと…。

少女は神に願い事を伝えた。

一つ、尾獣に匹敵する程のチャクラ

二つ、日本刀1本・小刀2本

三つ、原作の内容の記憶

少女の願い事を聞いた神は少女に転生先に送って行った。

これより『NARUTO』の世界で少女の新たな人生が開花する。

※原作を多少壊すかもしれません。

※能力的にチート要素があるかもしれません。

では…宜しく願います…。

1. 火影様と暗部とナルト。

”今”の私の名前は春野 サクラ。

私がサクラになって…3年が経ちました！

両親は忍びとか無縁の一般人でした。

今は日課になっている散歩中です。

サクラ（はあ…父さんと母さんたちが死んだ理由がまさか私を出産のせいとか…あり得ないな…ん？…いや、あり得るか…九尾の狐に匹敵する程のチャクラ量で母さんに負担があったんだと考えたら…しかし、何故父さんまで？）

私は散歩中父さん母さんの事を考えていた。

サクラ（母さん…私は生まれてきて良かったかな？…生まれて来なかったら…母さんは生きていたんだよね？）

私は立ち止まり天を見上げた。

サクラ「…はあ…」

？ 「サクラ？」

私がため息をついた時に後ろから声をかけられた。

サクラ「あ…暗部の兄さん」

暗部 「どうした？ため息とは？」

サクラ「いや…私が生まれて来なかったら…母さんは生きていたのかな？って思ってた」

私は暗部の兄さんにさっき考えていた事を伝えた。

暗部 「…サクラ、お前の母親は元々体が弱いと火影様に聞いた事がある…」

サクラ 「それは私も以前聞きました…私が負担を増やしたのかと」

暗部 「サクラ、その時、お前の母親の最後の言葉を聞いているな？」

サクラ 「聞いています」

暗部 「なら、そんな事を考えず前をしろ」

暗部の兄さんは私の頭を優しく撫でてくれた。

サクラ 「はい、暗部の兄さん聞いてくれてありがとうございます」

暗部 「構わん」

そう言い暗部の兄さんは姿を消した。

サクラ (…あ…第44演習場)

いつの間にか第44演習場…通称”死の森”に来てしまったサクラ。

サクラ (…今日は此処で修行でもするか)

サクラは第44演習場に入って行った。

それから数時間。

演習場からケモノたちの叫び声が聞こえ始めた。

暗部 「サクラ…ケモノたちを殺すなよ？」

先ほどサクラに声をかけた暗部が演習場の外から小さく呟いた。

数時間後、第44演習場に入って修行をし終え、また散歩をしていると碑の前に立つ里の者なら誰もが知っている人を見かけた。

サクラ 「火影様」

火影 「ん？おお！サクラか！久しいのう…元気にしとったか？」

サクラ 「はい！お陰様で…火影様もお代わりないようで」

火影 「お主は3つと思えんような対応じゃな？」

サクラ 「そうですか？」

火影 「そうじゃよ…さて、今日はどうされたのじゃ？」

サクラ 「はい！先ほどまで第44演習場で修行をしております…これから商店街に買い物を…」

火影 「修行を第44演習場でか…怪我には気をつけるようにのう…」

サクラ 「はい！火影様！」

私は火影様と別れ商店街に行った。

商店街で買い物をしていると…。

？「あら？サクラ？」

後ろから声をかけられた。

振り向くと其処には…。

サクラ 「ん？あ…紅さん！」

紅 「どうしたの？って聞かなくても分かるわ…その

荷物」

紅さんは私の持つ荷物の量を見て驚愕している様子だった。

紅 「少し持ちましようか？」

サクラ 「ありがとうございます…でも、後で巻物に入れますので…」

紅 「そう？ってまだ何か買うの？」

サクラ 「はい…これから花屋”花・やまなか”に行つて花の種や野菜の種を買いに」

紅 「そう、まあ気をつけてね？転ばない様に」

サクラ 「はい！」

私は紅さんと別れ、花屋”花・やまなか”に行つた。

買い物を済ませて自分の家に行くと、玄関先に暗部の兄さんが立っていた。

サクラ「暗部の兄さん？何か御用ですか？」

私が話しかけると、暗部の兄さんは振り返る。

暗部「…火影様がお前を呼んでいる…ついて来い！」

サクラ「分かりました！」

暗部の兄さんと私は火影様の処へ瞬身シュンシンの術で向かった。

火影様の処へ行くと数名の暗部の人たちがいた。

暗部「春野 サクラを連れて来ました！」

火影「ご苦労！」

サクラ「…火影様、何か御用ですか？」

火影「サクラ：お主に頼みたい事が二つある」

サクラ「二つですか？私に出来る事ならば…」

私は火影様の目を見て言った。

火影「一つ目は…うずまき ナルトと友だちになって欲しい」

サクラ「うずまき ナルト？…ああ…あの子ですか？構いませんよ」

火影「そうか…二つ目は…ナルトと暮らしてナルトと修行をして欲しいのだが良いか？」

サクラ「…ナルトと暮らす？別に構いませんが、何故修行を？」

火影「ナルトの事はお主も知っておるだろう？」

サクラ「まあ…影で大人たちがナルトに”化け物”って言っているからね…」

暗部「…」

火影「ナルトのチャクラはお主と同じ位あるはずじゃ、だから、チャクラをコントロール出来るように修行をして欲しいのだ…」
それを聞いて私は火影様に条件を出した。

サクラ「チャクラコントロールについて…条件があります！まあ…一つだけですが、聞いてくださいますか？」

火影「なんじゃ？」

サクラ「はい！6歳になったら、私とナルトをアカデミーに入学させて下さい！」

火影 「アカデミーに入学だけで良いのか？」

サクラ「…まあ、本当は、後一つありますが…」

火影 「言ってみよ」

私は大きくそして深く深呼吸した。

サクラ「…私とナルトを暗殺戦術特殊部隊アンサツセンジュツトクシユブタイに入れて下さい！」

暗部・火影 「っ!？」

暗部と火影様は驚愕していた。

サクラ「ダメですか？ダメでしたらこの話はなかった事に…」

私は火影様に背を向け、去ろうとした。

火影 「ま、待て!…暗部に入りたいのか？」

私は火影様に向き直る。

サクラ「入りたいですよ?…それに影でコソコソ監視されるより良いと思いますし、何せナルトがチャクラコントロール出来たとして里のために動くのも良いかと」

火影 「…」

暗部 「…」

サクラ「まあ、無理にとは言いませんよ?」

私は火影様に微笑みかける。

火影 「分かった…ナルトがチャクラをコントロールしたら暗部に二人とも入ってくれ」

サクラ「ありがとうございます!じゃあ、ナルトは私が預かります」

火影 「ああ…ナルト!入って来い!」

火影様が奥の部屋に声をかけると、ナルトがひよこつと顔を出した。

ナルト「なあに?じーちゃん?」

ナルトは火影様の近くに走っていく。

火影 「ナルト、これから其処にいるサクラと暮らさない」
ナルト 「え？…じーちゃんと暮らせないの？」

ナルトは首を傾げ火影様を見上げる。

サクラ 「…ナルト…貴方はどうして火影様と暮らしているか知ってる？」

サクラはナルトに声をかけた。

ナルト 「え？…どうして？…分からない」

サクラ 「貴方の中には私と同じ膨大なチャクラを持っている…」

ナルト 「え？膨大なチャクラ？」

サクラ 「そう、それが原因で貴方は里の人に避けられている…私はナルトの持つ膨大なチャクラをコントロールするために、一緒に暮らす」

ナルト 「い、意味が…」

サクラ 「…はあ…どう説明したらいいかな…火影様」

私は火影様を見上げる。

火影 「…ナルト、時が来たら教える予定だった…」

暗部 「火影様…あの話を？」

火影 「…今のナルトには辛いかも知れんが…構わん…」

ナルト 「な、何？」

サクラ 「火影様…私が言います！ナルト、貴方の中に”九尾の狐”が封印されている…私はその”九尾の狐”に匹敵するほどのチャクラを持っているわ！」

ナルト 「え？九尾の狐？な、なんで？」

サクラ 「この里を守る為に封印されたの」

ナルトは自分自身の事を聞き、初めは混乱していた。

サクラ 「ナルト、私と暮らさない？私はナルトと暮らしたいし、それに…友だちになりたい」

ナルト 「友だちに？」

サクラ「ええ」

ナルト「良いの？」

サクラ「良い」

その日から私とナルトは一緒に暮らす事になった。

ナルトが私の家に来て一週間は火影様の処にあったナルトの荷物を運び出し、引越しに費やした。

ナルト「此処がサクラの家？」

ナルトはサクラの家の中を見て啞然とした。

サクラ「そうだよ、何？」

ナルト「あんまり物が無い」

サクラ「まあね：私の精神は『断捨離』だからね」

ナルト「だ、断捨離？」

サクラ「ええ、不要なモノを断つ、不要なモノを捨てる、モノに対する執着から離れる：って難しいかな？」

ナルト「不要なモノを捨てるのは分かった」

ナルトは自分自身の荷物をサクラに案内された部屋に入れた。

部屋に荷物を全て入れ、整理した後、チャクラコントロールの修行から始めた。

里の人に見られない様に、第44演習場に移動して修行を開始した。

サクラ「まあ、まずはチャクラコントロールするために、瞑想して

チャクラの流れを知る事から始めましょうか？」

ナルト「チャクラの流れを知る？」

サクラ「ええ、坐禅は難しいから：正座でやりましょう！」

ナルト「正座：分かった」

私とナルトは正座し瞑想してチャクラの流れを感じた。

チャクラの流れを知る為の修行は1ヶ月みっちり行った後、手裏剣や忍術・体術の修行を毎日休みなく行った。

その間、暗部の兄さんたちが交代で様子をみに来たり火影様が第4演習場の様子を遠眼鏡トオメガネの術で見たり、監視は続いていた。

余談だが、5歳の誕生日の時にナルトの精神の中に行ったら、まあ、九尾の狐がいたので、ナルトと一緒に鍵を開けて、九尾の狐を倒すまでに成長した訳で、何とか九尾の狐をこちら側に突かせる事が出来た。

修行をして、2年半が経った頃に火影様の元に行き、暗殺戦術特殊部隊アンサツセンジュツトクシユブタイに所属させてもらった。

暗部での名前は…。

オウカ
サクラⅡ桜花
クヨウ
ナルトⅡ九？

まあ、他の暗部の兄さんたちと任務は最初はあったが基本的に二人で行動する事が多く、徐々スリーマンセルは少なくなった。

桜花 「九？…任務だよ」

九？ 「了解！」

今では二人で暗殺をし、影で里を護っている。

アンサツセンジュツトクシユブタイ
暗殺戦術特殊部隊に所属して数ヶ月が経った頃、里の人の間である噂が聞こえ始めていた事を暗部の兄さんたちが教えてくれた。

暗部 「九？、桜花。お前たちの噂が里の中で流れているぞ」

九？ 「噂？どんな噂が？」

暗部 「ああ、実はな、九？…ナルトが来年…半年後、アカデミーに入学するとか」

桜花 「アカデミーに入学…その条件を伝えてあるのは、暗部の兄さんたちと火影様だけのはず…誰かに聞かれていたのかな？」

九？ 「だとしても、暗部の兄さんたちと火影様に感知されなかったのか？」

暗部 「…感知されなかった存在か」

桜花 「暗部の兄さん…”根”の者なら考えられない？」

暗部 「”根”か…しかし、彼奴らは我々と同じで表に出ない筈だ！噂が流れる筈がない」

桜花 「そっか…じゃあ…動物」

暗部 「動物？口寄せ動物だとしても話せない動物もいるからな」

九？ 「まあ、いいんじゃない？どの道分かる事だったんだしさ」

桜花 「そうね」

暗部 「…じゃあ、この噂についての話は終わりだな」

桜花 「そうですね…わざわざありがとうございました」

暗部 「構わん」

私と九？はその後、火影様に呼ばれ、アカデミーに入学する為の書類や必要なモノを購入したり準備したりした。

アカデミーに入学する事は里中に広まり、大人たちがナルトを毎日睨みつけてきていた。

ナルト 「…其処まで？」

サクラ 「はあ…この里の者なら九尾の狐に怨みを持つ者は沢山いるから仕方ないよ？」

ナルト 「サクラも？」

サクラ「私は本心でナルトといえるんだけど、ナルトは私といたく無いのなら、去るよ？」

ナルト「サクラはたまに冷たい事を言うね？」

サクラ「ナルトがそう言わせているんだよ！」

ナルト「俺はサクラといえるのが一番好きだよ？…火影様に聞いたけど、俺の両親が俺に封印したの聞いて俺は最初…なんとなく分かってた…じゃないと里の大人たちが俺を睨みつける理由がないからね」
サクラ「ナルト、貴方は私がついているんだから、道を間違えないでね？」

ナルト「うん、俺の道はサクラとあるし（笑）」

サクラ「なんかプロポーズに聞こえる（笑）」

ナルト「えっ…／／／／／」

サクラの言葉にナルトは頭をかきながら照れていた。

その様子を暗部の兄さんが見ていた。

暗部 トオメガネ 「里の真ん中で良くやるな…あの二人」

※遠眼鏡の術で火影様も見えていたのは別の話（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0146z/>

桜花繚乱

2011年12月3日16時50分発行